

音韻巨細秘抄

全



音聲巨細秘抄

三才堂

夫音曲乃道平上去入四音四攝假名の
清濁を元として用合甲乙乃位法練磨止
愈々事あり辨用は位長短の墨譜其外
程拍子地を以て音字房の寄稿の持合あり
さるる等々遠く教を考へて先又取れ終る程
初段扱も其後二段目とて先段三段目去程
必は段目初七を扱又段目去間

右五ヶ條は分ち有とどろの心ゆへ音の出可き
乃終のゆへふそ切取らむ也終のゆへに心切
と夏元の記

初段

一越調とらしとら席文ふ入そ又終まきの終
其要急次あけ或ひら右終を引用しつる文
勢のそ詞乃位大ゆへふたけ長くおつる
是誠真の席とら又へ右あ乃心切せつる

地より終り出れし行の節と云ふ又ハ今撮の風俗
の詞也終るを草紙巻と云

二眼目

凡終羅衣強く文白さつらよん心は強く終る
たより愁ひぬきも十分ぬきの事也其心は有
身又ハ系るりかつら事ぬきも重なり行る
たのさつくと終る事也判

三眼目

津猫場乃去家一匹服を贈らて能たれば
曲舞あり但し津より北極向みよるを
なす連とも位を付て之服目めて終うと
公有熱歌ハ其実と意連と一書の津より
ひひみこ多々終る事ハ心の持や甲乙乃
秘事有くと云ハ物終り造去目兼感涙等
の函くみ是別あき

日記目

凡道初間を廣くわらばぬやうお終はば淨なりも
大やうお終はば人乃氣も盡るにたれどかたて入
ぬるに初に節支の身一とあらまらぬとあらまらぬと
若男女老若申一日路和路山路のえうり目
あきまきまきも是へお持平あり二味線より
そひ整へて終る抱へ志る運を二味せんふ合
はるるを賤し又い合ぬも終拍子波をうめ
ぬし其心好よりく省て席破急乃二六

帝は急破乃破といふ事、二史あるべし。

五段目

元同善始終のつるに違は交るあさるやのふ
善悪をことりに相子たるやくるさるぬやうふ
終る物也或は帝事なれば相子も格別ふ
いふあをたふふやうふ終り納るものなりと

海瑞瑞節章揖

夫帝章八天地陰陽又行を表七年中

四季七十二候と象として納る所の土用節考の
めせ春の万物開始乃心なれ。祝事色もろろ
事いふと有難。其中小神祇釋教戀無常
も亦も心と文句の肌は從ふ之。妻の火めく
のびる氣あるはなれ。先荒変換。種り
事強くさうんある公めく。その中い意も
た。此の良熱。離。意。秋の
合めて殺伐の氣なるは。法。群。解。なれ。

つらも考あやふ熱り衰傷み其なるおま
 心ちりの冬に氷あて物事静みそらくかすぬ
 とあまを心たき申承陽分の前時ATKENTあれま心
 持め其別の考有べしこま篇の字あめて
 四季の古用れまは依てこの味めて改る心あ
 連り此の中此に此に少、杯と付るあらしひた利
 何より此にめり此に此に此中の類み付る先
 其のたをわらなまはと位有文句の此中考る也

次お少のいお少ある中お少有向毎お少を
付るお及たぶ余の應章お記とがよ
たどつぐのいおあつり有るおおとぐの章は
きま中の中以下心持ある、おおおと
寫のい章章の次乃又文字七文字のいお
三又七の候名およ章下章を付まづお
系の程拍子よくおけ念折章廻章たぬ書
この事も謡乃通の事

又之し給ふ地を付るよしをちの申老河よりらる
ありきり河をよみと付るに重しをちらる
若らるはと懸る

打連入の書書の結出

其令或は者捕及

之指の類の中と付るがよし類の節誦念
あても若しうほま

又染の章心乃章とヤハ先染素の交向の
膚小染ト現在に付る心の素とヤハ表の
のほど重き指は之の素或の同ども持ぬ
節の足後一ありは支故少く宛り持たこ
び等をやん終る故素も取らぬ節を
作付も聞授いまとも作をみまをせらる
書記の偏み九牛が一毛といえん

今更し

諸より諸の形も

諸の形も

又

さうなる様

右の形も

ハ

何れなるか

ハ

海の中

是れ也

念
あつらひをさかす

又
うまのあゝあり

中
うまのあゝあり

少
又白をゆるぐ又文字を替る

本
あつらひをさかす

又
又白をゆるぐ又文字を替る

ニラユリ

ニラユリ

右本ノシの教多クありと略し行る者

たのむのまがたあ

やよめたるらん

け類のくし教くがま

四ツユリ

又

えんまのせみ

ハシタリ

ムシタリ

カキト

コシタリ

又

キ

文字とらむクシタリハカクシタリ
ハシタリ

何と云へるカ
ハシタリ

病敵ハカクシタリ
ハシタリ

何れハカクシタリ
ハシタリ

何ぞハカクシタリ
ハシタリ

中キ
ウキ
ムキ
下キ

文白
ハシタリ

ヲ

中也、走みらる、少くあること

スエテ

スエテ、スエテ、何とやら、志ん

物とやら

スエテ

中、めて、まう、スエテ、スエテ、スエテ

又

中、めて、スエテ、何とやら、志ん

也

スエテ、スエテ、何とやら、志ん

孝志ふかた

中めてさまう孝志ふかたの政免を

出るを孝志ふかたの政免を

クリ出有まの道も中へ後元

何とゆきまて物さる何とせん

さるとゆきま

又

スリ

如是章

右之外後者、又之イ落一はあ葉、

ヒロイ



イ上エ

二重落

何とゆ

如是章、
付すふ、
ヒロイと

何とゆ

如是方の

初喜やのののの

矢めあふら地めまのび

まの獲まはる丸

狂女出

又

大三重

悲之重

新あらたなりなり

家人いへの母ははなる人ひとの終はつみゆみゆ

法はふたみたみ着きととららみみなるなる

実まこと時ときああるる大おほいいぬぬ

ののとといいふふ事こととといいふふ

ああららたたのの後のちみみああららるるをを

大三重

志

玉堂

冷泉

半冷泉

刀のたかりあり
上

ちろるおのたかりあり
中

漢道おとせり
下

人の悦の目とらふたれり
冷泉

のまよめり
半冷泉

菊の志のまよめり
半冷泉

江戸冷泉

文彌

平家

平家

何ぞせう物ぞせうと
江戸冷泉
 かしこ物ぞせうと
上
 ちくさもひあつむいぬ
文弥

文弥の章文より、
 悉くハ象よ及たハ
 洋キエリ、教くちう、

御様とて中まで錦と
 城郭のわくとええ家
平家

半太夫

氣走
等めめたるもほま
八幡山崎去柄持るる

是もあぐり家り季

まぐてまをまつていおまのた中出ると

みおろくしおともしんを放もてし

何ぞてうおぞて

久キ

久キ

シヨトクカニ
我身ハ
重ク
命ヲ
シヨトクカニ

キニクナリ上、教ニ

切ニ出テ
我身ハ
シヨトクカニ

外記

又

藤波大船寄着せり
 くるしきひらめし
 河とゆきておとせり
 しんまといふ
 わさくみの小松原の
 事なつみおとせり

海乃

の松老と味方は軍勢を
いよいよ加勢を奮つた
月夜に舞臺の歌舞の
み押寄つてみ送せ勢
を籠りて追ひ去る
初も山中暮るも山中又ひ是

友^ウ迎^一入^一愛^一め^一る^一人^一の^一疾^一の^一ち^一も
の^一ち^一も^一疾^一の^一ち^一も^一疾^一の^一ち^一も^一

狂言哥 引あ有

謡 ぬか 一セイ 上坊

右の節ヨミクセ

サイモシ 地義純

鉢夕ノキ 次 一上リ 二上リ 三下リ

音声 大

サガリ 承りつとつと

一仲 半仲 國太夫

其外数く有れ知らるる故畧之

系必あといふも文をよらうて此有

是いあつく所よ多人有る之採了

考らふものちをた万指し心と対考

指す肝要あり落書物忘廉お

公遠時代無量志御免々々

吃^{ども}のかろりゆう口借

カキクケユけろ、咽^ハ人^ノかり、息^ノより出^ル。

アイウエラ^ハ此^ノかろ、口^ノと^ル出^ル者^ノきあり。

ヒフ^ハ木^ノ 作^ルアイウエラ^ハ鼻^ノ人^ノかろ。

マミムメモ^ハけろ、上^ノ下^ノの口^ノと^ルあて吃^ル。

タケツテ^ハ此^ノかろ、上^ノあて付^ルツル^ル事^ナ。

ナニ又^ハ子^ノけろ、舌^ノと^ルあて吃^ル。

サシスセソ^ハ此^ノかろ、口^ノと^ル出^ル、齒^ノを^カ合^スる^ル事^ナ。

ラリルレロ ぬうま、おと巻氣味に吃らぬや
ヨユヤ けうま、吃らぬや

右の心持をてぬうま、熱神あたる文字ハ
先志らぬ方より、又文字けきぬて
上の字をうぬぬも有返魂香のぬんま
けさぶとらぬ文句あとの終るげ心持あり、
ハの能名と、いとらぬ事もちあま。

竹本大和椽

高第

竹本千賀大夫

後

有觀堂

門第 竹本千賀大夫讓之

文化六巳年初隻江戸通油町

板

濱松屋幸助

元

多田屋利兵衛

同是橋通三百

音戸三千了